

みどモスアイデアコンテスト

みどモスAR “おもてなし” ラリー



貞富 雄太

みどモス活用の「次なるステージ」へ

みどモスを活用し地域経済への貢献と若年層への訴求力強化を図り、みどり市の観光・地域活性化の課題解決を目指します。

1. みどモス活用の課題

- ・ 市民には浸透しつつあるものの、「さらなる普及促進」と「新たな価値創出」が求められている。
- ・ キャラクターとしての一方的な情報発信に留まり、具体的な「行動変容」に繋がる仕掛けが不足。



2. 観光・地域経済の現状

- ・ 「素通り」されがちな観光客を地域のお店に誘導する仕組みが必要。
- ・ デジタルネイティブ世代への訴求力強化。

解決の方向性

- ・ みどモスが「きっかけ」となり、「行きたい」「買いたい」を生み出す参加型・体験型コンテンツ。
- ・ 地域経済への貢献も同時に実現できる仕組み。

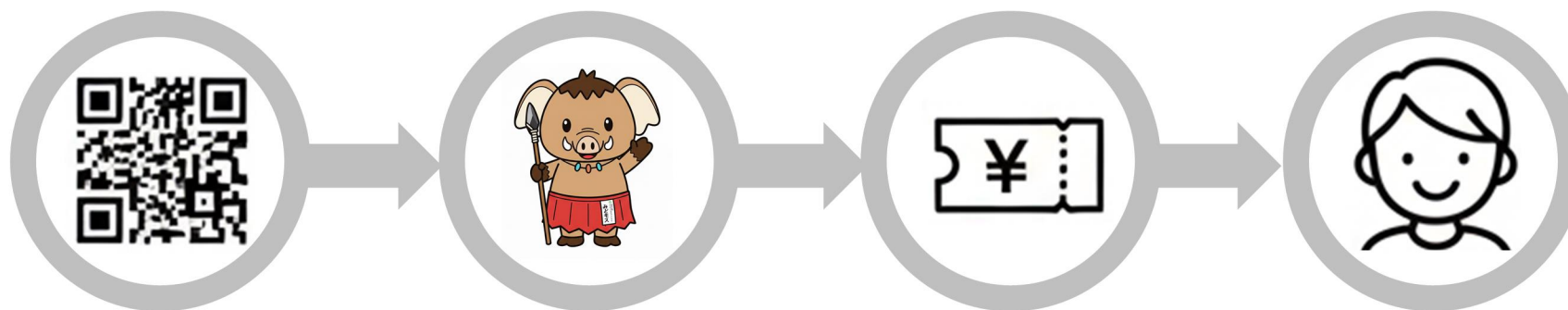
みどモスAR “おもてなし” ラリーとは？

「Web AR」で手軽に体験:

- 専用アプリ不要！スマホでQRコードを読み込むだけで、現実世界にみどモスが出現。

「ARスポット」設置:

- 観光名所: 岩宿博物館、草木湖、富弘美術館、高津戸峡など
- 地域のおもてなし店: 市内の商店街、飲食店、道の駅、宿泊施設など、地域経済を支える店舗と連携。



QRスキャン

参加者がスポットのQRコードをスマホで読み取る

みどモス出現

画面に3Dのみどモスが出現。一緒に記念撮影

特典GET

デジタルスタンプ獲得と同時に、限定クーポンなどの特典をGET！

周遊・消費

集めたスタンプやクーポンを使い、市内の店舗や施設で実際に消費。

圧倒的な「体験価値」と「拡散力」

1 場所と連動するみどモス

- ・ 単なる立ち姿ではない！各スポットの特性に合わせたユニークなARみどモスを配置。
例：岩宿博物館では「石器を持つみどモス」、草木湖では「釣り竿を持つみどモス」、製麺所では「うどんを食べるみどモス」。
- ・ みどモスが音声で地域の豆知識やトリビアを教えてくれる「おしゃべりみどモスAR」。

2 感動を生むインタラクティブ演出

- ・ 特定のARスポットでは、簡単なクイズを出題。正解すると、みどモスが特別なダンスを披露したり、背景に花火が上がるといった「サプライズ演出」。
- ・ 季節ごとのAR演出（例：桜の時期は桜吹雪、冬は雪の結晶）。

3 SNSでの強力な「自発的拡散」

- ・ 「こんなみどモス見たことない！」「ここでしか聞けない話！」といった驚きや発見が、参加者のSNS投稿意欲を最大限に引き出し、みどモスとみどり市の魅力を自然に拡散します。



地域と共創！「持続可能な活性化モデル」

1 地域経済への直接貢献

- ARスポットを地域のおもてなし店に設置し、限定クーポンを付与。ラリー参加が直接的な消費行動へ繋がります。
- お店側は新たな集客手段となり、みどり市は経済の活性化データを得られます。

2 高い実現性と費用対効果

- Web AR技術の活用で、アプリ開発に比べて開発コストと運用負担を大幅に削減。
- 必要最小限の設備（QRコードパネル）でスタート可能。
- 商店街組合や観光協会との協力で、スポット開拓や情報連携もスムーズ。

3 市民との『共創』関係

- 市民主体の「おもてなし店」がARスポットとなることで、市民が「自分たちの街を案内する」という意識が芽生え、シビックプライドを醸成。
- 「みどモスを盛り上げる」だけでなく、「地域を盛り上げる」具体的な施策となります。

みどモスAR “おもてなし” ラリー:みどり市の未来へ

施策の効果

- みどモスの「普及促進」と「新たな価値創出」
- 地域経済への貢献と周遊促進
- 他にない「体験価値」による強力な情報拡散

将来の展望:

- 集客データに基づいた新たな観光施策の検討。
- 季節限定イベントや、市民投票による「隠れた名店ARスポット」の追加など、拡張性の高さ。
- みどモスが、みどり市全体を盛り上げる「地域共創のアイコン」へ進化。

